

## 届けよう！ラジオの災害放送

～自分たちの暮らしを守る最適な放送とは～

授業者 安倍 堅介

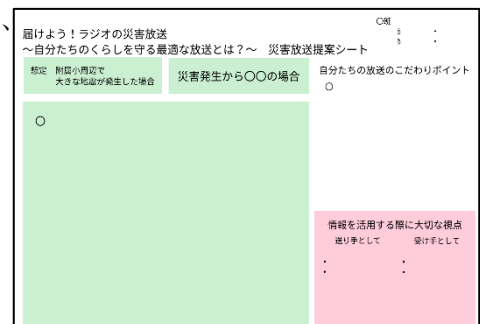
### 1 本実践の教材について

本単元では我が国の産業と情報との関わりについて、情報を集め発信するまでの工夫や努力に着目して、聞き取り調査等で調べまとめ、放送産業の様子を捉え国民生活に果たす役割を表現することを通して、放送などの産業は国民生活に大きな影響を及ぼしていることを理解することをねらいとしている。

誰もが情報の送り手・受け手になりうる現代の情報化社会、子どもたちはテレビ・ラジオ放送、新聞等のメディアから情報を受け取ることはあっても、その情報が放送し伝えられるまでの送り手の工夫や努力、苦労等には目が向きにくいのではないかと考える。これは実際に送り手として情報を収集・選択・加工して発信する経験が少ないことも要因であると考え。本校の子どもたちにおいては、テレビやラジオ放送は世の中に情報を伝える役割があるというように一面的な捉えに留まっている様子が多く見受けられる。そんな子どもたちに対して、情報の受け手として放送産業に携わる方の工夫や努力について学習し、単元終盤に情報を活用する際に気を付けることを考えさせるだけでは、子どもたちが送り手・受け手として納得感を高めて報道の役割を捉えることは難しいだろうと考える。実際に情報の送り手としての文脈も大切に学習をすすめることで、報道は人々を元気づける側面があること、聴取者のニーズに応じた内容を放送している等、報道の多様な役割に気付いてほしいと切に願う。

そこで本単元では、ラジオ放送の意義について調べ話し合うことで、情報の送り手・受け手として大切なことを考える活動を中心に設定する。子どもたちの生活経験とは距離のあるラジオ放送だからこそ、単元の学習展開を工夫することでその意義を深め、上記の情報を活用する際に大切なことを更新できるだろうと考える。その際、災害放送を中心に学習を行うことで、より高い迅速性や正確性が求められることに加えて、双方性によるリスナーの置かれた状況に寄り添い共感することで励ましや音楽などを提供する共感放送（大牟田智佐子、『大災害とラジオ』.ナカニシヤ出版,2024年）の在り方、聴取者のニーズに応じて時期によって放送内容を変えていること等ラジオ放送の意義（本実践では、ラジオ放送ならではのよさ）について深められるだろう。その後、意義について共感し理解を深めた上で、ラジオの災害放送を作成し熊本シティエフエムの方に提案する機会を設定したり、ラジオ放送の収録をしたりする中で、話し方の工夫を行うことで情報をより鮮明に伝えようとしていることや音声のみだからこそ受け手に想像力の余白を与える等ラジオ放送ならではのよさに共感し、報道の役割にせまれるようにする。

単元の導入では、テレビ放送に比べて聴取時間も減少しており、自分たちの生活を振り返っても利用経験が少ないラジオ放送はなぜなくなるのか話し合うことで、高齢者や障害のある方、ながら聴取で生活に役立てられている方など多様な立場からの必要性に気付くことができるようにする。その後、災害時にラジオ放送が役立つのは、電源の面からだけだろうか考えていく中で、主題「届けよう！ラジオの災害放送～自分たちの暮らしを守る最適な放送とは～」を設定し、熊本シティエフエムの方への聞き取り調査を通して、ラジオ放送の意義について深められるようにする。



単元後半に作成する災害放送シート

特に本時では、熊本地震当時のラジオ放送でアンパンマンのマーチが流された理由を考えていく中で、共感放送の在り方や聴取者のニーズを考えて災害発生からの時期に応じた内容を発信すること等ラジオ放送の意義について考えを深められるようにする。

## 2 単元の構想

本実践では、次の2点をポイントに単元を構想する。

- 子どもたちの身の回りのラジオ放送を聴取している方やラジオ放送に携わる方の思いを聴く機会を設定することで、情報を活用する際に大切なことについて多角的に考えられるようにする。
- ラジオの災害放送に焦点化して学習をすすめることで、双方向性による共感放送の在り方や聴取者のニーズに応じた放送等ラジオ放送の意義について考えを深められるようにする。

## 3 研究の視点に沿った具体的取り組み

### (1) 自分事として社会的事象の追究に向かうための単元構成の工夫

導入では、資料「全国個人視聴率調査の結果」(NHK 2022)を提示し、テレビ放送に比べてラジオ放送の視聴時間がとても短いことに着目させる。その際、子どもたちに「あなたたちはラジオ放送をよく聴きますか」と尋ねることで、自分たちの生活経験を見直し、「国民の視聴時間が短くなっているのに、ラジオ放送はなぜなくなるのだろう」という問いをもつだろう。災害時に役立つからという理由や情報の受け手の立場に着目して考えていく中で、高齢者や障害のある方、ながら聴取をされている方などに思いを馳せ、受け手の立場を大切にラジオ放送聴取の現状を捉えていくだろう。

ラジオ放送を貴重な情報源としている方の存在に気付いた上で、災害時に役立つ理由について取り上げる。前単元「自然災害とともに生きる」での学習を想起させたり、資料「熊本地震の際の各ICTメディアの位置付け」(株式会社三菱総合研究所 2017)の一部を提示しラジオ放送とテレビ放送を比較させたりすることで避難している方のために迅速性や正確性がより重要になることに気づき、それらがラジオ放送において高いことについて問いを生み出せるようにする。その後、熊本シティエフエムの方に聞き取り調査を行い、情報の送り手としての工夫や努力について調べ、単元の学習を通してラジオ放送の意義について深められるようにする。

### (2) 対話を通して社会的事象を多面的・多角的に捉えるための手立て

1つ目は、単元を通して追究するラジオ放送の意義を「ラジオ放送ならではのよさ」としてまとめていくことである。学習の中で見いだしたよさを学習シートや掲示物等に表していくことで、ラジオ放送の意義について多面的に考え、その捉えを更新できるようにする。

2つ目は、単元を通じた立場の意識付けである。単元の学習を通して「情報を活用する際に大切なこと」を送り手・受け手の立場から考えていくことで、自分たち事として多角的に考えられるようにする。また、ラジオ放送聴取の経験や思いを保護者への聞き取り調査の結果を基に考えたり、熊本地震当時のリスナーの声といった資料を活用したりすることで、子どもたちがその立場の方に思いを馳せて多角的に考えられるようにする。

### (3) 学習の過程を振り返り、社会との関わり方の更新を促すための工夫

ラジオ放送の意義について考えたことや考えの変容やそのきっかけ、次時への見通し等について振り返りをさせ、学びを深められるようにする。教師が取り上げ全体で共有したり、価値付けたりすることで、子どもたちが社会的事象に関わる際の視点を増やしたり、更新したりできるようにする。

また、単元の学習において、子どもたちがラジオ放送の意義について理解を深めた上で実際に災害放送を考え、熊本シティエフエムの方に提案したり、収録したりする活動を設定する。実社会の人やものと関わり学びをすすめることで本単元での学びに実感が伴ったり、話し方の工夫で情報をより鮮明に伝えようとしている等、ラジオ放送の意義に新しく気付いたりして報道の役割にせまる姿を目指していく。

子どもたちがラジオ放送について、単元で行ってきた学びの様子は  
こちらのブログからご覧ください。

